

# ヨエル書とラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第五

いつまで？ 第五の封印

Jeff Pippenger

2025-12-07

「その時のための光が与えられる」とき、それは「受け入れられる」か「拒まれる」かのいずれかである。光がもたらされるときに成し遂げられる分離は、神の民への封印だけでなく、麦と毒麦の分離をも含む永遠の福音の働きである。最終的な試みと分離の過程は、9/11に始まった。そのとき預言的な問いは「いつまでか」と問われ、預言的な答えは「日曜法まで」である。「いつまで」という象徴についての最後の言及は、黙示録の第五の封印に見出される。

そして彼が第五の封印を開いたとき、私は祭壇の下に、神の言葉のために、また彼らの持っていた証しのために殺された者たちの魂を見た。彼らは大声で叫んで言った。「主よ、聖なる方、真実なる方よ、地に住む者たちに対して、いつまで裁きを行わず、私たちの血の復讐をしてくださらないのですか。」

そして、彼ら一人ひとりに白い衣が与えられ、彼らには、彼らの仲間のしもべたちや兄弟たちのうち、彼らと同じように殺される者たちの数が満ちるまで、なおしばらくの間休んでいるようにと言い渡された。ヨハネの黙示録 6:9-11

靈感は、「殺された者たちの魂」が発した「いつまでか」という問いへの答えが、将来、教皇権の殉教者の第二の群れが形成される時に与えられることを示している。それは日曜法から始まり、このためホワイト夫人は、黙示録18章を殉教者の第二の群れの成就として位置づけている。最初の五節には二つの「声」があり、第一の声は9/11を指し示し、第二の声は日曜法の時に人々にバビロンから出て来るよう呼びかける。ホワイト夫人は、第五の封印にある「いつまでか」という象徴を黙示録18章1~5節と結びつけ、9/11から日曜法に至る筋道を示している。焦点は、神の民の分離と封印ではなく、過去の歴史の殉教者と、日曜法の危機の間に教皇権の第二の殉教者の群れを構成することになる殉教者たちを殺害したことに対する、教皇権への裁きにある。

「第五の封印が開かれたとき、黙示を受けたヨハネは、幻のうちに、神の言葉とイエス・キリストの証しのために殺された人々が祭壇の下にいるのを見た。これに続いて、忠実で真実な者たちがバビロンから出て来るよう召し出される、黙示録第18章に記された光景が現れた。[黙示録18章1-5節、引用] 『Manuscript Releases』第20巻、14頁。

彼女が第五の封印の殉教者たちと、日曜法危機において形成される将来の第二の殉教者の群れを特定している別の箇所、彼女はそれらの場面は「将来のある期間に起こるだろう」と述べている。黙示録18章の二つの声は、その「将来のある期間」を表している。第一の声は9/11の始まりに、第二の声は日曜法の時に。

「そして、彼が第五の封印を開いたとき、私は、神の言葉のゆえに、また彼らの持っていた証しのゆえに殺された人々の魂が、祭壇の下にあるのを見た。彼らは大声で叫んで言った、『聖にして真実なる主よ、いつまでですか。地に住む者たちに対して私たちの血の裁きを行い、復讐してくださらないのは。』また、白い衣が彼ら一人ひとりに与えられ〔彼らは清く聖なる者と宣言された〕、なおしばらくの間休むようにと言い渡された。彼らの仲間のしもべたちや兄弟たちで、自分たちと同じように殺されることになっている者たちの数が満ちるまで。」〔黙示録 6:9-11〕ここでヨハネに示された光景は現実そのものではなく、将来のある時期に起こるであろう事柄であった。

「『ヨハネの黙示録』8章1～4節を引用。」『Manuscript Releases』第20巻、197頁。

ホワイイト姉妹は、殉教者の第二の群れの形成が将来成就することを関連づけており、また別の箇所では黙示録18章1～5節を引用して、最初の三節に一つの声が、四節と五節に別の声が示されていると述べている。最初の声は、ニューヨークの巨大な建物が崩れ落ちた9/11を示し、第二の声は、神のもう一つの群れがバビロンから呼び出される時、すなわち日曜法である。二つ目の箇所では、彼女は黙示録第8章の最初の四節に言及し、ここでは第七の封印が開かれ、祭壇から取った炭が地に投げられると記されているが、これは天から火が下って弟子たちを照らしたペンテコステと符合する。ちょうど、エリヤの十二の石が照らされたのと同様であり、また弟子たちの上に火の舌として現れたのと同じである。

### いつまで？ ゼカリヤとヨハネ

「いつまで」は、9/11から日曜法に至る期間を表す預言的象徴であり、そのことはカルメル山の物語、1840年から1844年にかけてのミラー派の歴史、モーセの第八の災いから第十の災いに至る歴史、第五の封印の殉教者たちの証しにおいて予表されている。また、ゼカリヤ書では、七十年間バビロンにあったエルサレムに神がいつあわれみを示されるのか、「いつまで」なのかが問われている。

すると主の使いは答えて言った。「万軍の主よ、この七十年の間、あなたがお怒りであったエルサレムとユダの町々を、いつまであわれんでくださらないのですか。」

そして、主は、私と語っていた御使いに、良い言葉と慰めの言葉でお答えになった。

私と語っていた御使いは私に言った。「叫んで言え。『万軍の主はこう仰せられる。わたしはエルサレムとシオンのために大いなるねたみを抱いている。安んじている異邦の民に対して、わたしはひどく怒っている。わたしはわずかに怒ったにすぎないのに、彼らは苦難を助長したからだ。』」「それゆえ、主はこう仰せられる。『わたしは憐れみをもってエルサレムに帰って来た。わが家はその中に建てられる、と万軍の主は仰せられる。測り縄がエルサレムの上に張り渡されるであろう。』」「なお叫んで言え。『万軍の主はこう仰せられる。わたしの町々は繁栄によってなお広がり出る。主はなおシオンを慰め、なおエルサレムを選ばれる。』」ゼカリヤ書 1:12-17

ホワイイト夫人は、文字どおりの古代イスラエルが文字どおりのバビロンに隷属していた期間であるゼカリヤの「七十年」（七十年）を、霊的イスラエル（キリスト教徒）が霊

的バビロン（ローマ・カトリック教）に隷属していた538年から1798年までの千二百六十年と、直接対応づけている。

「地上の神の教会は、この長く容赦のない迫害の期間中、捕囚の期間にイスラエルの子らがバビロンで囚われていたのと同様に、まさしく捕囚の状態に置かれていた。」

『預言者と王たち』714ページ。

1798年、千二百六十年の終わりに、黙示録14章で天使として象徴されている三つのメッセージの第一が到来した。第二は1844年4月19日に、第三は1844年10月22日に到来した。「いつまでか」という問いで象徴されている歴史は9/11から日曜法に至るまでであり、その期間は、アドベンチズムの黎明期、すなわち1840年8月11日から1844年10月22日までのミラー派運動において予表されていた。その期間は、口には甘く腹には苦くなる小さな書をヨハネが食べるという、黙示録10章の象徴的描写によって示されている。

そして、私が天から聞いたその声が再び私に語り、「行って、海と地の上に立っている天使の手に開かれている小さな書物を取りなさい」と言った。そこで私はその天使のところへ行き、彼に「その小さな書物をください」と言った。すると彼は私に言った。「取って食べなさい。それはあなたの腹を苦くするが、あなたの口には蜜のように甘いだろう。」そこで私は天使の手からその小さな書物を受け取って食べた。するとそれは私の口には蜜のように甘かったが、食べ終わるやいなや腹は苦くなった。

そして彼は私に言った。「あなたはもう一度、多くの民、国々、言語、王たちの前で預言しなければならない。」黙示録 10:8-11。

ヨハネが示している歴史は、食べられた書物によって表されている。というのも、その食べることは、ミラー派の人々がそのメッセージを理解し、そのメッセージを宣べ伝える際に味わった経験を象徴していたからである。したがって、その歴史が示された直後にヨハネが再び預言しなければならないと告げられるとき、そこで特定されている預言とは1840年から1844年に至る歴史のことである。ヨハネは、1840年から1844年のミラー派の歴史が、アドベント主義の終末の歴史の中で繰り返されると告げられている。ヨハネは再び預言しなければならないと告げられるやいなや、神殿を測るようにも命じられる。

そして、わたしに杖のような葦が一本与えられた。御使いが立って言った、「起きて、神の神殿と祭壇と、その中で礼拝する者たちとを測れ。しかし、神殿の外庭は除いて、これを測ってはならない。これは異邦人に与えられているからである。彼らは四十二か月の間、聖なる都を踏みにじるであろう。」ヨハネの黙示録 11:1, 2。

1844年10月22日以後にアドベンチズムに与えられた働きは、ヨハネによって、神殿の測量（あるいは建造）として表され、主が「なおエルサレムを選ばれる」がゆえに「エルサレムの上に再び測り縄が張られる」というゼカリヤ書に示された約束と一致している。アドベンチズムの初めに、ミラー派アドベンチズムにおけるフィラデルフィアの運動によって表された歴史は、アドベンチズムの終わりに、十四万四千人におけるフィラデルフィアの運動によって繰り返される。1844年10月22日の大失望において、「第七の天使の声の日々」と表される一つの期間が始まった。

しかし、第七の御使いの声が響き、彼がラッパを吹き鳴らし始めるとき、神の奥義は成就する。神がそのしもべである預言者たちに告げられたとおりである。黙示録 10:7

1840年8月11日に、ミラー派が事前に予告していたとおり、イスラムに関する第二の災いの時の預言が成就したとき、そのメッセージはミラー派にとって甘いものだった。1844年10月22日の大失望において、そのメッセージは腹の中で苦くなった。ヨハネが1840年から1844年に至る歴史を描写し終えるやいなや、彼はまったく同じこと（預言すること）をもう一度しなければならないと告げられる。次いで彼はエルサレムを測るよう命じられ、それを行うとき、主がエルサレムを選ばれるというゼカリヤの預言と一致している。1844年10月22日以降、預言的歴史は「第七の天使の声の日々」として表される。第七の天使（第三の災い）のメッセージ（声）の「日々」は、キリストの神性が、十四万四千となるはずの人々と永続的に結び合わされる時期を表している。その働きは1863年の反逆によって遅らされ、そして9/11に、第七の天使（第三の災い）のラッパが再び鳴り始めた。

聖史において、主は御名をそこに置くためにエルサレムを選ばれ、その「名」とは主の御性質である。ゼカリヤは、「わたしは大いなるねたみをもってエルサレムとシオンをねたむ」と述べ、さらに「主はなおシオンを慰め、なおエルサレムを選ばれる」と言って、エルサレムとシオンに言及している。シオンは、「慰め主」である聖霊を受けるときに慰められる。聖霊による慰めは、復活後に御父と会見されたのちの下って来られたキリストが弟子たちに息を吹きかけられたことに一致して、9/11に始まった。聖霊の現れはペンテコステで大いに増し加わった。その季節は、初穂のささげ物がよみがえらされることから始まり、ペンテコステの初穂のささげ物で終わり、そのとき全世界がそのメッセージを聞いた。

慰めよ、慰めよ、わたしの民を、とあなたがたの神は言われる。エルサレムに慰めの言葉をかけ、彼女に告げよ。彼女の戦いは終わり、彼女の咎は赦された。彼女はすべての罪のために、主の御手から二倍の報いを受けたからである。イザヤ書41:1、2

十四万四千人は、「彼らの不義が赦される」ときに封印される。これは日曜法の直前に起こる。彼らは、弟子たちがペンテコステで型示したように、限りない聖霊の注ぎを受けつつ、ペンテコステの初穂のささげ物として高く掲げられる。9/11に始まった霧雨は、日曜法において完全な注ぎとなる。歴史においては、9/11の初穂のささげ物から日曜法における初穂のささげ物へと至るとき、すなわち十四万四千人が封印され、日曜法から恩恵期間の終わりまで旗印として掲げられるささげ物として備えられるときである。その歴史は、バビロンの陥落を告げる黙示録18章の最初の三節によって表されており、バビロンは「倍化」を表す聖書の象徴である。

これらのことの後、私は、天から降りてくるもう一人の天使を見た。その天使は大いなる権威を帯び、その栄光によって地は輝いた。彼は力強い大声で叫んだ。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。彼女は悪魔たちの住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき鳥の檻となった。というのは、諸国の民はみな彼女の淫行の怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地の商人たちは彼女の贅沢の豊かさによって富を得たからである。」黙示録 18:1-3

聖書全体を通して、語句の繰り返しは、終わりの日におけるバビロンの陥落の完全な成就を表している。それは、物事の終わりをその始まりによって常に示すアルファでありオメガである方のしるしである。バビロンの二度の陥落は、ニムロデとベルシャツアルとして表されている。ニムロデは、まだ単にバベルと呼ばれていた頃のバビロンの始まりであった。ニムロデの没落はベルシャツアルの没落を表しており、第二の天使と黙示録十八章の天使のメッセージは、バビロンの初めに起こったニムロデの没落が終わりにおけるベルシャツアルの没落を表していたということである。なぜなら、アルファでありオメガである方は、いつも物事の終わりをその始まりによって示すからである。

ニムロドの塔は、彼の没落の象徴として打ち倒され、彼は9・11のツインタワーの崩壊を象徴していた。ベルシャザルの没落は「壁の文字」であり、それは聖書予言の第一の王国としてのバビロンの七十年の支配の終わりを示すものであり、したがって、1798年から日曜法に至るまでのアメリカ合衆国の歴史を表すイザヤ書二十三章の象徴的な「一人の王の日数に従って七十年」の終わりにおけるアメリカ合衆国の没落をも象徴している。ベルシャザルの「壁の文字」は、日曜法の時に教会と国家の分離の壁が崩れる時を表しており、それこそが聖書予言における第六の王国が終わる時点であり、ちょうどベルシャザルがその夜に殺されたのと同様である。壁の文字とは、憲法における教会と国家の分離の壁を覆すために制定される法律のことである。

9/11から日曜法に至り、その後、人類の恵みの時の終わりと七つの最後の災いに至るまでの「歴史」は、神の言葉の中で、語や句の二重化によって象徴されている歴史的期間である。その期間、聖霊は注がれ、9/11から日曜法までは「振り掛け」として始まり、その後完全に注ぎがある。聖霊は、来られるときに神の民にすべてのことを示す「助け主」としてキリストによって表されている。

しかし、助け主、すなわち父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに語ったすべてのことを思い起こさせてくださる。ヨハネの福音書 14:26

「『黄金の油』、すなわち『雨』であり、また『慰め主』でもあるものを通して、聖霊は十四万四千人に注がれる。『慰め主』として表されるとき、聖霊は聖霊の特別な現れを指し示している。」

神の民は、福音の条件を満たしたときには常に聖霊を受けてきた。しかし、「かつてのような」真の聖なるリバイバル、すなわち共同体全体に対する聖霊の特別な顕現があるときには、聖霊は慰め主として示される。さらに重要なのは、慰め主が『すべてのことを彼らに思い起こさせる』ので、共同体の人々の記憶が働かされているという点である。これは、その顕現にあずかっている人々が本物の経験をしていることの実証である。というのも、聖霊は『すべてのことをあなたがたに思い起こさせる』ことによって彼らの心の働きに参与し、思考過程に影響を与えているからである。

人間の記憶は、判断力、知性、理性、良心といった他の要素と結びついて人間の高次の本性を形作っており、使徒パウロはこれを「思い」と呼んでいる。この高次の本性は、「肉の思い」か「キリストの思い」のいずれかである。

なぜなら、肉の思いは神に敵対しており、神の律法に従わず、また従うこともできないからです。ローマ 8:7

いったい、だれが主の御心を知り、主に教えることができたのか。しかし、私たちはキリストの心を持っている。コリント人への第一の手紙 2章16節

下なる性質、すなわち肉は、「魂への通路」である感覚に結び付いた神経・感情・ホルモンの諸系から成っている。高次の性質は下なる性質を統治するように造られており、そのため要塞として表される。そしてその要塞は感覚（下なる性質）から絶えず攻撃を受けており、その攻撃は要塞へと通じる通路を通して仕掛けられる。高次の性質という要塞の内部には司令中枢、すなわちシスター・ホワイトが城砦と呼ぶものがある。その城砦は聖所の至聖所であり、聖所は基本的に二つの区分に分かれている。中庭は肉、すなわち下なる性質であり、中庭に入るにも、また血を聖所へ移すにも、幕またはベールを通過することが求められた。中庭は幕によって両端を挟まれている。

彼は、幕、すなわちご自身の肉体を通して、私たちのために新しい生ける道を設けてくださった。ヘブル人への手紙 10章20節。

聖域は二つの部分、すなわち外庭と聖所に分かれている。聖所もまた、高次の本性と同様に、二つの部分に分けられる。高次の本性は二つの領域に分かれる。その一方は聖所として、もう一方は至聖所として表される。聖所は人類が機能するために必要な精神活動を表すが、至聖所は神と人が出会う領域である。至聖所は神の御座の間であり、回心した者はキリストとともに天にある所に座らされている。

また、私たちを共によみがえらせ、キリスト・イエスにあって、天にあるところで共に座らせた。エペソ人への手紙 2:6

その節は、同じ思考の流れの中で、その少し前の数節においてイエスが天にある所に座しておられ、彼の民も同様であると述べている箇所から引用されている。

神がキリストにおいてなされたことは、彼を死者の中からよみがえらせ、天においてご自身の右の座に着かせたことである。エペソ人への手紙 1:20。

キリストとその民は、至聖所で共に座している。キリストは復活し、天において座し、その民も引き上げられて、至聖所の御座の前に座している。パウロは、六節で引き上げられた者たちは、その前の節で罪からよみがえらされた者たちであると明らかにしている。

私たちが罪のうちに死んでいたときでさえ、キリストと共に私たちを生かし（あなたがたは恵みによって救われたのです）、また私たちを共によみがえらせ、キリスト・イエスにあって天において共に座らせた。エペソ人への手紙 1:5, 6。

エペソ人への手紙のその箇所の完全な成就是、黙示録11章11節の二人の証人に見いだされる。彼らはよみがえらせ、旗印として天に上げられ、また天にあるところに座らせられる。至聖所において、この二人の証人は神の御前で人類を代表しており、彼らがそこに座することの正当性は、各々が持つ徽章によって保証される。その徽章とは神の印であり、神の印は、人が神性と一つになったことを表す。その印は、慰め主である聖霊が、彼らの高次の本性の至聖所に住んでおられるという事実によって示されている。至聖所は、神

性と人性が結び合わされる神の御座の間であり、また、それは、人という神殿の高次の本性に、神性と人性が共に座する至聖所が備わっていることを表している。

「慰め主」の注ぎ出しは、十四万四千人への封印であり、それは救済史における転換点を画する。というのも、その時、教会は戦闘教会から凱旋教会へと変わるからである。その時、十四万四千人のラオデキヤの運動から、十四万四千人のフィラデルフィアの運動へと変わる。その時、第七の教会の経験から第六の教会の経験へと変わり、第六の教会とはミラー派であった。ミラー派運動によって成就した、第六の教会であるフィラデルフィアの預言的特徴は、それが決して教会ではなかったという点である。ホワイト夫妻がその運動をラオデキヤと位置づけた1856年に至るまで、それはあくまで運動にすぎなかった。その7年後、法的に組織された教会が成立した。

日曜法における救いの変化は、キリストが大祭司として就任されたことを画した五旬節における救いの変化によって予表されていた。

ペンテコステにおける聖霊の注ぎは、贖い主の就任が完了したことを告げる天からの知らせであった。約束どおり、彼は天から聖霊をご自分に従う者たちに遣わした。これは、彼が祭司にして王として、天と地におけるすべての権威を受け、その民を治める油注がれた方であることのしるしであった。使徒行伝、38。

日曜法の時に、十四万四千人の上に際限なく後の雨が注がれるとき、それは、戦う教会が終わり、凱旋の教会が到来したことを告げる天からの宣言となる。天の聖所におけるペンテコステでのキリストの就任は、日曜法における十四万四千人の油注ぎを予表している。

「ペンテコステ」的な注ぎは、キリストが油注がれた方であることを示すもので、天における就任式での彼の油注ぎを表していたが、彼はバプテスマの時にも油注がれていた。彼のバプテスマ（9/11）からペンテコステ（日曜法）までの過程は、バプテスマから三年半後、彼の実際の死・埋葬・復活（初穂の祭り）によって、もう一度表されている。したがって、9/11は彼のバプテスマにおいても、また彼の復活においても表されている。彼の象徴的な復活と文字通りの復活は、それぞれがペンテコステで終わる二つの預言の線の始まりを示している。両方の歴史は、初穂のささげ物の復活から始まる。

しかし今や、キリストは死者の中からよみがえり、眠った者たちの初穂となられた。人によって死が来たのだから、人によって死者の復活もまた来たのである。アダムにあってすべての者が死ぬように、キリストにあってすべての者が生かされる。しかし、おのおのにその順序がある。まずキリストが初穂であり、その後に、来臨のときにキリストに属する者たちが復活する。コリント人への第一の手紙 15:20-23。

キリストはご自身の復活において初穂のささげ物となられ、それは「ペンテコステの季節」の始まりを告げ、ペンテコステの初穂のささげ物をもって終わります。キリストの復活は大麥に相当し、小麦は「その後」「来臨のときにキリストのものとなる」人々です。キリストの復活の「その後」に属する者たちは「来臨のときにキリストのものとなる者たち」であり、したがって、世の終わりにおける忠実な魂の最終的な刈り入れを表しており、それはペンテコステに集められた三千の魂によって象徴されています。

その節はまた、死という観点から復活に言及している。死はアダムに始まり、すべての人に及ぶが、しかしそれは「in」「order」に行われる。使徒行伝でペテロは、ヨエル書がその時まさに成就しつつあったとき、人々は、慰め主の御前から回復の時が来たときに罪がぬぐい去られるよう、自分の罪をあらかじめ裁きに付すべきであった、と記している。キリストはその時、罪をぬぐい去るために裁きの書を開いておられたのではなかった。というのは、裁きはなお千八百年以上も未来のことだったからである。

「各々その順序に従って」という言及はアダムに始まり、したがって、回復の時が到来するまで、アダム以降の死者に対する裁きを指し示している。後の雨が到来すると、裁きは死者から生者へと移る。この節が表す期間（キリストの復活から五旬祭まで）、すなわち大麦の初穂から小麦の初穂に至る間、生者の裁きの最中に雨が降っており、その雨を表すメッセージが降るにつれて、麦と毒麦がより分けられていく。五旬祭である日曜法の時には、麦はもはや毒麦と混ざっておらず、小麦の初穂としての二つの揺りパンのさきげ物が掲げられる。9/11から日曜法に至る浄化の過程は、マラキ書3章にも表されており、そこで契約の使者がレビ人を清め、また「火」によって彼らをきよめる。「火」は、五旬祭の火の舌に示されているように、メッセージの象徴である。ここで取り上げている歴史において、二つの階級の分離は、五旬祭の初穂によって表される二つの揺りパン、すなわち十四万四千人を生み出すが、その揺りパンは徹底的に焼かれるべきであった。というのも、それは罪のしるしを含む唯一の供え物だったからである。

あの二つの揺り動かすパンはパン種を入れて作られており、パン種は罪の象徴である。そのパン種はかまどの火で滅ぼされ、これは契約の使者の精錬する者の火によって表されている。イザヤは第27章で、9/11に始まる論争を指摘し、それを「東風の日」と呼んでいる。その箇所は、論争を通してイスラエルの罪が贖われることを教えている。その「論争」とは、真の後の雨のメッセージと、存在するほかのすべての偽の後の雨のメッセージとの間のものである。メッセージは「火」であり、その「火」こそが契約の使者が清めと浄化のために用いるものである。後の雨のメッセージをめぐる論争は、日曜法の時に掲げられる五旬祭の初穂の小麦の供え物からパン種を取り除く。十四万四千人は五旬祭の初穂の小麦の供え物であり、彼らは彼の血による義認と、その証しの聖別によって勝利する。というのも、聖別するのは言葉であるが、その言葉がメッセージとして伝えられるときにのみそうなるからである。メッセージの提示は十四万四千人を生かし、偽りの後の雨のメッセージの提示は死をもたらす。

彼らは、小羊の血と自分たちの証しの言葉によって彼に打ち勝ち、死に至るまで自分のいのちを惜しまなかった。ヨハネの黙示録 12:11

十四万四千人は、キリストが打ち勝ったように打ち勝つことでキリストに従う。なぜなら、預言的に彼らはキリストに従うからである。

彼らは女に汚されておらず、童貞である。彼らは小羊が行くところならどこへでも従う者たちである。彼らは人々の中から贖い出され、神と小羊にさきげられた初穂となった。黙示録14:4

ここ黙示録十四章四節では、十四万四千人が「初穂」とされている。彼らはまた「乙女」ともされており、靈感によれば、マタイ二十五章の十人の乙女のたとえはアドベンチス

トの民の経験を描いている。彼らは「乙女」であるだけでなく、「女によって汚されていない」というのも、十四万四千人を生み出した試練と分離の過程が、十四万四千人と「すべて」の偽りの宗教との間に区別を生み出したからである。「これらの者」は、小羊がどこへ行こうともそれに従い、そして初穂の捧げ物として、キリストの死と葬りと復活においてキリストに従わなければならない。

黙示録11章11節では、旗印として掲げられるべき二人の証人は、まず殺され、そして三日半の後、キリストと同様に初穂のささげ物としてよみがえらされる。過去においても現在においてもキリストである初穂のささげ物には、ラオデキア的な経験によって破産状態にあった者たちを贖うために、契約の血が流されることが伴っていた。これらすべては、十四万四千に関連するさまざまな預言の光の筋の簡潔な要約として、ただ一節（4節）に示されている。そしてそれは、驚くべき数え手であるパルモニの手によって、黙示録14章4節において示されている。聖書における二重は、後の雨の歴史を表しており、そして後の雨とは、助け主が神の民の上に注がれる場であり時である。

良い知らせを携え、平和を告げ、幸いの知らせをもたらし、救いを告げ知らせる者——その者の足は、山々の上とにかくに麗しいことか。シオンに向かって「あなたの神は統べ治めておられる」と言う者よ。あなたの見張りたちは声をあげ、声を合わせて共に歌う。主がシオンを戻される時、彼らはそれを目の当たりに見るからだ。エルサレムの荒れすたれた所よ、共に喜び、声をあげて歌い出せ。主はその民を慰め、エルサレムを贖われたからだ。主はすべての国々の目の前で、その聖なる御腕をあらわにされた。地の果てまでも、わたしたちの神の救いを見る。去れ、去れ、そこから出よ。汚れたものに触れるな。彼女のただ中から出よ。主の器を担う者たちよ、身を清めよ。イザヤ書 52:7-11

シオン H6726 は H6725 と同じであり、それは「目立つこと、記念碑的または導きの柱—しるし、称号、道しるべ—」を意味する。シオンは十四万四千人の旗印の象徴であり、その箇所では彼らはすでに後の雨を受けている。なぜなら、彼らはすでに平和の良き知らせを告げ知らせ、もたらしたからである。さらに、その事実には特有なのは、彼らが「目と目を合わせる」ということであり、これは五旬節の弟子たちを表している。というのも、五旬節前の十日間は一致の期間を表しているからである。主は「hath」（過去を表す）とあり、良き知らせをもたらし者たちのためにすでに三つのことを成し遂げておられる。すなわち、「ご自分の民を慰め」、「エルサレムを贖い」、「すべての国々の目の前でその聖なる御腕をあらわにされた」。

9/11に、彼は彼の民を「慰めた」。それは、マラキ書第3章の試しの過程の始まりを示し、その過程は日曜法において、彼が初穂の供え物の旗印を掲げるとき——すなわち「すべての国々の目の前で彼の聖なる腕をあらわにする」ことによって表されているように——に完結する。彼は、十四万四千人を慰め、贖い、引き上げる。9/11に、彼は慰め、浄化の過程を始め、そこで彼は彼の民を贖い、その後、彼らを旗印として掲げる。あるいはマラキが言うように、「ユダとエルサレムの供え物は、昔の日のように、喜ばれる」。

彼は銀を精錬し清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金銀のように精錬して、彼らが主に義のささげ物をささげることができるようにする。そのとき、ユダとエルサレムのささげ物は、昔の日々のように、往年のように、主に喜ばれるものとな

る。マラキ書 3:3、4。

「どれくらい」に関する考察を次の記事で締めくくります。

「『手に箕を持っておられ、打ち場を徹底的に清め、麦を集めて倉に納められる。』マタイ3章12節。これは清めの時の一つであった。真理の言葉によって、もみ殻が麦からふるい分けられていた。戒めを受け入れるにはあまりにも虚栄と独善に満ち、謙遜な生活を受け入れるにはこの世を愛しすぎていたため、多くの者がイエスから離れていった。今もなお多くの方が同じことをしている。今日も魂は、カペナウムの会堂にいたあの弟子たちのように試されている。真理が心に迫ると、自分の生き方が神の御心になっていないことが見えてくる。自分自身が全く変えられる必要を悟るが、自分を捨てる務めを引き受けようとはしない。だから、自分の罪が明るみに出ると怒り、弟子たちがイエスから離れたときのように、つまずいて去って行き、『これは聞きにくい言葉だ。だれがそれを聞いていられようか』とつぶやく。」『The Desire of Ages』392頁。